

## 二 勝手聞き、得手聞き

兵隊嫌ひの男が外國に居たさうな。一つ聾者になつて甘く検査を誤魔化さうと、何を云はれても返事せずポカンとして居る。軍醫先生、誰も居ない一室に導いて對座し、透聲で「お前ほんまに聾者か」と云へば「はい左様でございます」と、透さず答へて化の皮が現はれたとか。人は至つて勝手聞をし、かつてつんぼ勝手聾者になりたがる者である。

昔は汽車がないから馬に乗つて旅をする。馬方が喋舌出した。「モシ旦那、世間には随分途方もない奇妙な事もありますよ。昨日乗せた旦那は珍らしく偉いお方で、賃錢はもう定めたが、思へば餘り安すぎる。酒代は別にやるとして、此處でも一つ飲めと仰しやつて、途中一休して確り振舞はれた上に。コリヤ馬方、貴様一日馬を引き乍ら歩いてさぞ草臥れたらう。是から乃公は下りて、其の代りに貴様を乗せてやらうと仰しやる。厭ひですと言つても聞きなさらぬ。旦那が態々手綱を執つて引いて行かつしやる。遂々宿まで行着くと、貴様馬に乗つて、さぞ尻が痛くなつたらうと云ふので、乗賃まで下さつた。何と偉い事ぢやありませんか」。馬上の客は知らぬ振して、空軒をかいて居る。「旦那危い、お起きなさい」と云はれて、漸く氣の付いた振をし、目をこすりながら、「あんまり馬が遅くて埒が明かぬものだから、つひ眠氣がさして來た。昨日乗つた馬は良い馬であつて、馬方も亦とんと氣の善い男であつた。その馬方が云ふには、旦那は恁んな早い馬に乗りなされて、今に落ちようか、コリヤ滅多に眠つてはならぬと心配してゐなさるだらう。夫が氣の毒でなりませぬから、もう賃錢は貰ひますまいと云つて、途中の宿へ來ると、旦那は馬の鞍で腰が痛みませう、ちと下りてお休みなさい。若し酒でも召上るなら酒代は此方から上げませうと云つて、散々酒を勧め。それから約

束そくの所ところまで來ると、先さきの宿しゆくまで送おくつてあげたいが、私わたくしの馬うまは跳はねますから外ほかの馬うまを取とり代かへて行ゆかつしやれ、駄だ賃ちんは私わたくしがあげませうと言いふたが。あんな氣きのよい馬うま方かたもないものだ」とやるので、馬うま方かたは歩あるきながら、眠ねむつた振ふりをする積つもりか「ゴウくムニアく」。

恚こんな事ことは何い時つ迄までも聞きいては居あられまいが、折せ角っ親か切くしんに言いうて下くださる善ぜん知ち識しの御お言こと、何なに故ゆゑにそれそれが耳みみに入はいらないのか「教けう語ごを以もつて開かい示じすれども、信しん用ようする者もの少すくなし」。嚴きびしい御ご意い見けんではありませんか。